

ハロウィンイベント盛りだくさん！

10月、町ではたくさんの方のハロウィンイベントを開催しました。

文化ギャラリーハロウィンウィーク（21日～11月30日）では「Trick or Treat」でお菓子やチェキのプレゼント。国際交流員（CIR）メイヴさんによ



▲アイルランドのハロウィン



▲めだかのクラブハロウィン



▲そらいろハロウィンパーティー

そらいろハロウィンパーティー（28日）は、お化け釣りやボウリングなどのゲームで大盛況。開催時間前からたくさんの子が訪れ、多世代交流を楽しみました。小学生ボランティア（そらいろきっず）もパーティーを盛り上げてくれました。今後さまざまなイベントがありますので、参加してみてくださいね。

絵本で育つ心とからだ

10月5日、子育て支援センターで山本公美さんの子育て講演会「絵本で育つ心とからだ」を開催しました。

初めに「こんにちは。今日はみんなと絵本を楽しみたいです！」と絵本から優しい声が聞こえ、絵本の世界に引き込まれました。絵本を使った「わらべうた」で、手をつないで、お尻を揺らして遊ぶと、子どもたちは大喜び。みんなで「ハリー！」と返事をしたり、絵本の果物を見て「全部食べたよ！」と身を乗り出して



▲思わず身を乗り出す子どもたち

てお話しする楽しそうな姿が見えました。山本さんは「子育て中、絵本が私を助けてくれました。子育てって最初は『初めて』ばかり。こうすれば私にもできそう、とお手本にもなりました。ある本には、『絵本を読み聞かせる一番の目的は、親子と一緒に絵本の世界に没入、一心同体の世界で喜びを分かち合う体験にある』と書いてあります。エンドレスで『この本を読んで』と言われると、親は大変ですが、その時間はとても幸せなものです。大きくなって子どもは覚えていたりして、力になっているかもしれません」と語りました。

大雪山愛護少年団、大雪山国立公園を考える

10月7日、旭岳ビジターセンターで岡崎哲三さん（北海道山岳整備代表・（一社）大雪山山守隊代表）による講演「大雪山国立公園の動植物や登山道の問題」を開催。大雪山国立公園の利用と保全を考える「大雪山愛護少年団」は今年55周年を迎え、東川中学校の生徒たちが受講しました。

岡崎さんは例年姿見の池周辺や裾合平

などにおける登山道の修復・整備を行っています。講演では国立公園内に生息する野生動物との共生や、国内外の観光客が利用する登山道の浸食、植生崩壊の問題への取り組みを団員たちに解説。質疑応答では「国立公園の問題は？ヒグマの親離れはいつ？登山道にとって環



▲左から上川総合振興局中島さん、愛護少年団の団員、岡崎さん

境に良い材料は何？」など団員からの質問が飛び交い、大雪山国立公園について一緒に考える機会となりました。岡崎さんは「愛護少年団の一員として、地元の国立公園の素晴らしさと、問題に対する情報を発信して、みんな考えていきたいと思います」と語りかけました。

る発祥地アイルランドのハロウィン（22日）では、アイルランドの紅茶と「Barin Breac（ハロウィンパン）」を試食。中に指輪が入っていて、当てれば1年以内に結婚するジンクスが！めだかのクラブハロウィン（24日～26日）は外国文化体験として毎年秋に開催。3日間で140人の子どもたちが参加しにぎわいました。ALT・CIRお手製のお化け屋敷は悲鳴が飛び交い、もう一度入りたい子もいれば、途中リタイアする子も。クラフト工作では可愛いかぼちゃのランタンを一生懸命作りました。

盲導犬チャリティイベント

10月7日、せんとびゅあーにて、盲導犬チャリティイベントが開催されました。「主催・東川イベントサポートクラブ、協力・町（未来チャレンジ補助金）」。

当日は目隠しをして盲導犬と歩く体験会、盲導犬グッズ販売のほか、盲導犬について北海道盲導犬協会の佐々木博紀さんと盲導犬ユーザーの館石昌浩さん、盲導犬ハナちゃんが登場し、実演・お話ししてくれました。館石さんは「盲導犬には『自分の速さで歩きやすい』や『冬に寒に歩ける』などの良さがあり、お出かけがしやすくなりました。歩行の手伝いの声掛けはとても助



かりますが、盲導犬の集中力が切れないように、見かけても犬には話しかけないでいただけたらと思います」、佐々木さんは「盲導犬ユーザーは横断歩道で、音で車を判断しなくてはなりません。そのため、ユーザーを見かけたら補助してもらえると安心できます」と語りました。

最後は2組が演奏披露。町地域活性化バンド「飛呼露天（ところてん）」のノリノリの演奏には会場が大いに盛り上がり、観客が一体となって手を振る場面も。なんとドラムは菊地町長！旭川市で盲導犬育成のためチャリティライブを継続しているバンド「V・GOLD」はしっかりととした大人な演奏で、最後を締めくくりました。

働く吃音症の若者たち

10月22日、国際吃音（きつおん）啓発デーに合わせてせんとびゅあーで「働く吃音症の若者たち」を開催。当事者が吃音症と仕事について語りました。

当事者としてお話ししてくれたのは、阿部勇司さん（町子ども発達支援センター）、黒澤伸幸さん（豆腐屋）、吉野翔志朗さん（大学生）の3人。熊田広樹先生（旭川市立大学准教授・言語聴覚士）とゼミナールの学生たちも参加。3人は「吃音を隠したこともあるが、電話対応など大変なこともあるので、職場の理解が大切だとわかった。吃



音の苦しみより、吃音を超える情熱や好きなことがあると良い。「緊張している？落ち着いて」と言われると嫌に思う当事者もいる。早く気づいて言葉の教室に通えたことはありがたかった」などとお話ししてくれました。

最後に熊田先生は「有名な対応には、遮らずに話を聞くなどがあるが、必要な支援や配慮は人それぞれ。言葉はその人の一部ではないのに、吃音がその人の全てのように人生の選択を迫られることもあり、『言葉』はとても大きなもの。吃音を超える素敵などころや、それさえも人格の一部のようにオープンに話せる機会があると良い」と語りました。

その声で語る意外な接点、建築×コンディショニング

10月11日、共生プラザそらいろの落成記念特別対談「建築×コンディショニング」を開催しました。そらいろのデザイナーを監修した建築家・隈研吾氏と町民の健康づくりを任せて3年目の㈱R・b・o d.v代表・鈴木岳 氏が、建築とコンディショニングという今まで類を見ない対

談を展開。東川と2人の共通項は、人が楽しくなる・行きたくなる場所が必要だと思っっていること。隈氏は「（「適疎」な町と同じく）施設に大事なものはスキマ（空間・余白）。建物は生き物だから、どんどん変化する。柔軟な作り方をしているのです、この施設でたくさん人が出

会い、いろんな提案・発想が出てきたら面白い」、鈴木氏は「身体を『整える』ことをスポーツ選手だけでなく一般の方にも広げ、町の人のライフパフォーマンスを上げるのが使命。人と出会うためには健康で外出できないといけないので、そのお手伝いができ



れば」とお話しされました。さまざまの世代が交流しながら健康にもなれる「そらいろ」に、ぜひお越しください。対談は公式YouTubeでご覧になります。



▲町公式YouTube